

東シナ海開戦5

戦略的忍耐

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 橋頭堡	18
第二章 嘉手納	42
第三章 魔性の女	69
第四章 深淵なる部屋	97
第五章 プロメテウス作戦	123
第六章 陰謀論	150
第七章 脱出行	173
第八章 イージスの盾	196
エピローグ	211

登場人物紹介

日本

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

〔原田小隊〕

はら たけみ
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕としての活躍。コードネーム：キャッスル。

まち だ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ が ひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目かけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしばらたけとみ
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みず の ともお
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

み どうぞう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大家。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

お だ ぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたか ま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あま り ひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

〔民間軍事会社〕

おとなしせい じ
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。^{P M S C}
`へブン・オン・アース、内に滞在していた。

にし な ゆ き お
西銘悠紀夫 元二佐。`魚釣島警備計画甲2、の指揮をとる。

あかいしとみひこ
赤石富彦 元三佐。

こ ぐれりゆう じ
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。二〇年前に引退し、北海道でマタギとして暮らしていた。

〔水陸機動団〕

し げ びかる
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが³……。

〔航空自衛隊〕

まるやまたく み
丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

なが せ ゆたか
永瀬豊 二佐。原田が所沢の防衛医大付属病院で世話になった医師。防衛医大卒で陸上自衛隊のレンジャー・バッジを持っている変わり者。

み やけたかとし
三宅隆敏 三佐。予備自衛官。五藤彬の恩師。

〔総隊司令部〕

は ぶ みねみつ
羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

^{き た がわ}
喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。情報将校。横田出身で、父親はイ
ラクで戦死したアメリカの空軍将校。

^{しんじょうあい}
新庄 藍 一尉。父親は^{おづき}小月の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

（警戒航空団）

^{と がわけい こ}
戸河啓子 二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

（第六〇二飛行隊）

^{うちむらたい じ}
内村泰治 三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上が
り。

〈海上自衛隊〉

^{さ えき まさあき}
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信^C頼^I醸^C成^P措^O置会議の、日本
側代表団を率いていたが、バイオ・テロによる感染症で死亡。

^{かわはた ゆ たか}
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

^{しもぞの しげ き}
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

^{い せ ざきたもつ}
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

（第一護衛隊群）

^{くにしましゆん じ}
國島 俊 治 海将補。第一護衛隊群司令。

^{うめはらとくひろ}
梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

（航空集団）

^{ひのうえこう た}
樋上幸太 二佐。P-1 乗り。前職は鹿屋の第一航空隊幕僚。航空隊
総司令部のエイビス・ルームに参加。

〈外務省〉

^{く じょうひろうし}
九条 寛 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。`ヘブン・
オン・アース、日本側の事務方トップ。

〈防衛省〉

〔陸幕防衛部〕

^{たけよしのり}
竹義則 二佐。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〔海幕防衛部〕

^{ふくはらくにひこ}
福原邦彦 二佐。海幕防衛部装備体系課付き。前職は護衛艦の艦長。
航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〔豪華客船 “ヘブン・オン・アース、”〕

ガリーナ・カサロヴァ `ヘブン・オン・アース、の船医。五ヶ国語
を喋るブルガリア人女性。

ゴトウキ 五藤彬 ^{ミヘブン・オン・アース}、の船医。感染症学が専門の研究者。

コレエダヒコウマ 是枝飛雄馬 プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘われ、^{ミヘブン・オン・アース}に乗り込んだ。

ナミカワミコ 浪川恵美子 是枝が思いを寄せるビオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

ナジブ・ハリファ ハリファ&ハイガー・カンパニーのCEO。
豪華客船内のバイオ・テロの首謀者。

//// **アメリカ** //////////////////////////////////////

〈陸軍〉

マークス・グッドウィン 中佐。グリーンベレーのオブザーバー。

〈海軍〉

クリストファー・バード 元海軍少将。太平洋相互協力信頼醸成措置会議のアメリカ側代表団。佐伯昌明元海上幕僚長のカウンターパート。

〈海兵隊〉

ジョージ・オブライエン 中佐。海兵隊オブザーバー。

（ネイビーシールズ）

カイル・コートニー 曹長。チーム1のベテラン。

エンリケ・リマ 大尉。部隊の指揮をとる。

//// **中国** //////////////////////////////////////

（中南海）

パンホンダ 潘宏大 中央弁公庁副主任。

（国内安全保衛局）

チンチウファン 秦卓凡 二級警督（警部）。

スウエ 蘇躍 シユウエンロン 警視。許文龍が原因でウルムチ支局に左遷されたと思っていた。

（科学院武漢病毒研究所）

マリモ 馬麗夢 博士。主任研究員。

〈海軍〉

（総参謀部）

レンスユアン 任思遠 少将。人民解放軍総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアントン

黄桐 大佐。局次長。

(`蛟竜突撃隊。)

シユイスントン

徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊、を指揮する。

ソンヂン

宋勤 中佐。元少佐の民間人で、北京大学日本研究センターの研究員だった。任思遠海軍少将に請われ復歸した。

(南海艦隊)

トンシニアオニン

東曉寧 海軍大将 (上将)。南海艦隊司令官。

ホワイチイ

賀一智 海軍少将。艦隊参謀長

ワントン

万通 大佐。艦隊対潜参謀。

(東海艦隊)

タンドンミン

唐東明 大将 (上将)。東海艦隊司令官。

マ・チンリン

馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。アメリカのマサチューセツ工科大学でオペレーションズ・リサーチを研究し、博士号を取った。その後、海軍から佐官待遇でのオフアがあり、軍に入る。唐東明の秘蔵っ子。

(K J - 600 (空警 - 600))

ハオフェイ

浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

イエフワン

葉凡 少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー

秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。電子工学の修士号をもつ。

カオシュエビン

高学兵 中尉。機付き長。浩が関わるずっと前から機体開発に関わっていたベテランエンジニア。

(Y - 9 X 哨戒機)

チョンクイラン

鍾桂蘭 少佐。AESAレーダーの専門家で、哨戒機へのAESAレーダーの搭載を目指す女性。

(第 164 海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン

姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン

万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン

雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

タイイーチ

戴一智 中佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体に

なり旅団情報参謀に任命された。

(台湾)

ライシャオオチャオ

賴筱喬 サクラ連隊を率いて戦死した賴龍雲陸軍中将の一人娘。台北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が`チャオ、と呼び、店の開店を支援している。

ワンチーハオ

王志豪 退役海軍中将。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

ワンウェンション

王文雄 司馬の知り合いで、司馬は`フミオ、と呼ぶ。京都大学法学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親善協会の幹部候補生兼党の対外宣伝部次長。

〈陸軍〉

(陸軍第 601 航空旅団)

フーシヤンジェン

傅祥任 少将。旅団長。

フォンチェンダアン

馮陳旦 中佐。作戦参謀。

(`龍城部隊、)

ピンロンレン

平龍義 少佐。第1中隊長。

ランチーリン

藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。第1中隊ナンバー3の乗り手。コールサイン：マリリン。

ファンイーチェン

黃益全 少尉。藍志玲大尉の前席射撃手。既婚者のベテラン。

(フロッグマン部隊)

ホーイージュン

何一中 大尉。フロッグマン部隊を指揮する。

〈海軍〉

リーヂーチャン

李志強 大將。

ツァイズン

蔡尊 中佐。

(`海龍、)

イエーションハオ

顏昇豪 大佐。`海龍、艦長。

チュフイ

朱蕙 中佐。`海龍、副長。以前は司令部勤務で燻っていたが、切れ者の女性。

(台湾軍海兵隊)

(フロッグマン 両棲偵捜大隊)

ユエウエイルン

岳威倫 中士(軍曹)。狙撃兵。コードネーム：ドラード。

ルードンファ
呂東華 上等兵。狙撃兵。

〔第99旅団〕

チェンヂーウェイ
陳智偉 大佐。台湾軍海兵隊第99旅団の一個大隊を指揮する。

ホァンジュンタン
黃俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

ウージンファ
呉金福 少佐。情報参謀。

ヤンヂーミン
楊志明 二等兵。美大を休学して軍に入った。

〈空軍〉

リーイェン
李彦 少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジェンホン
劉建宏 中佐。第17飛行中隊を率いる。

///シンガポール///

〈インターポール・反テロ調整室〉

シユウェンロン
許文龍 警視正。R T C N代表統括官。

メアリー・キスリング R T C Nの次長。F B Iから派遣された黒人女性。

しば た ゆき お
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボム ホ
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

///イギリス///

〈英国対外秘密情報部（M I 6）〉

マリア・ジョンソン M I 6極東統括官。大君主。

オーバーロード

東シナ海開戦5

戰略的忍耐

プロローグ

上陸地点では雨が降っていた。

最初は乗ってきたエアクッション艇のエンジンが巻き起こす飛沫しぶきかと思ったが、そうではなかった。風があるせいで、横殴りの雨だ。

上空を舞っていたヘリコプターのローター音は静かになった。というか、それが聞こえたのはほんの一瞬だった。

エアクッション艇のエンジン音に圧倒され、上陸した後もしばらく耳鳴りが続いた。足下はまだ揺れている。あと一〇分も揺られていたら吐いていたに違いない。

全身ずぶ濡れで、動いたたびに軍靴の中で水がち

やぶちやぶ動いている。優れた排水機能がこの軍靴の売りだったはずだが、ちっとも良くはない。

それに寒かった。濡れているせいで、容赦なく体温が奪われていく。何か他のことを考えて気を紛らわさねば気が滅入りそうだった。

兵を呼びまとめる下士官の怒鳴り声があちこちから聞こえていた。砂浜と呼べる空間はなく、岩場伝いにどうにか陸地に上がったと思えば、すぐジャングルだ。砂地はどこにもなかった。

ここは、昨日までいた東沙島とはまるで違う……。

第164海軍陸戦兵旅団・作戦参謀の雷炎大佐は

そう思っていた。少しでも口を開くと、エアクツシヨン艇のエンジンが巻き上げた砂粒が中に入り不快だ。

まだ夜明け前だった。遠くの景色は見えないが、座礁した魚雷艇があちこちで燃えているため、全くの暗闇というわけでも無かった。

東沙島はリーフが発達した平坦な珊瑚礁の島だが、ここは違う。三〇〇メートルを超える峰々が連なる立派な島だ。そして昨日までは無人島だったが、今は違う。日本、台湾、そして我が人民解放軍の海軍陸戦隊が上陸していた。

ここからは、敵を追い出して島の占領に成功した者の所有となる。それだけの価値がこの島にあるとはとても思えないが、任務だから仕方ない。

雷炎は他人に見つからないよう肩をすくめ、小股で歩いた。これからジャングルの中に入り、夜が明けるまで雨宿りしながらじっとしていればい

いのだ。作戦指揮は誰かがとってくれるだろう。

だが、ここで運悪く情報参謀の戴一智中佐に見つかってしまった。戴は一介の情報担当士官に過ぎなかったが、東沙島で上官が戦死したため、急遽、情報参謀を任せられた。そして武勲ありと判断されて、東沙島からの移動中に中佐昇進の辞令が出ていた。

「戴少佐、いや中佐に出世したのか。君、別に僕を探していたわけじゃ、ないよね」

「幸運でした。たまたま視界に、いかにも自分を探してくれるなという素振りで見ている士官が目止まり、大佐殿だとわかりました。まさにこれは僥倖というやつですね」

「……君も修羅場をくぐって、皮肉がうまくなったな」

「度胸がついたことは事実です。人間、死ぬ時は死ぬんです。われわれにできるのは、その時期を

ほんの僅かだけ遅らせることでしょう。さあ、命令をください、作戦参謀」

「命令と言ってもさあ……。参謀長や旅団長は、どこに？」

「旅団長は、予定通り島の東端付近に上陸したはずです。参謀長もご無事で、われわれより少し西側にいるかと。慎重に動かないと、敵と遭遇する危険があります」

「僕は、何をやればいいのかな」

「まずは指揮所設営です。自分は、すでに警戒用のドローンの離陸を命じました。次は、近くにいろはずの、蛟竜突撃隊との接触ですね。彼らから情報を得ないと」

「中佐のその暗視ゴーグルで覗いてほしいんだが、沖合に軍艦はいるかな。日本の巡視船とかでもないが」

戴中佐は波が碎ける岩場の向こうへと視線を向

け、双眼の暗視ゴーグルで東西の沖を何度か確認した。

「浮かんでいる船はいません。この雨で視程も限られますが、日本の船も、もちろん友軍の艦艇もいません」

「ここさ、補給は期待していいの？」

「無理ではないですか。空中戦のどさくさに紛れての上陸で、それでも、何隻か攻撃を受けたようです。しかし空軍力では、われわれの方が圧倒しているので、消耗戦に持ち込めば勝てると空軍の奴らは豪語しています」

「そんな景気の良い話、どこで聞いたんだ」

「情報を集めるのが自分の仕事ですから」

「そうだよなあ」

雷炎は、ここで全面降伏するという態度で、両手を腰に宛がって言った。

「雨が上がるまでは、敵の攻撃は無いとみていい

だろう。それまで、仮の中隊指揮所を設けよう。なるべく大きな木を探してくれ。太い幹だ。幹が大きいということは、上は繁っていてドローンからは見えない。下ではライバルの樹木は育たないから空間があるということで、指揮所を設営できる」

「了解です。やはりあなたを信じてよかった。大佐にはきつと軍神の守り神がついているんですよ。さあ、行きましょう」

「とは言っても、どうやって探す？ この雨ではドローンの暗視カメラでもジャングル内はよく見えない」

「はい。このゴーグルでも、ジャングルでは二〇メートル先も見えませんか。しかし事前に偵察衛星のデータから起こした詳細な3Dマップがあります。上陸ポイントを北斗衛星から割り出せば、どの辺りの木が一番成長しているのかがわかりま

す。ただ、蛟竜突撃隊もいるため、そんなに良い場所が残っていないでしょう。中隊指揮所は奪い合いになりますよ」

「仮でいいよ。ここに長居などしない。二日でわれわれが制圧するか、それとも全滅するかのどちらかだ。東沙島のようにはいかないよ」

「それは、覚悟するしかありませんね。この制空権を確保しようとしたら、空海軍の戦闘機の全てをぶち込むくらいの覚悟は必要でしょう。しかしその後の台湾攻略にも備えなければならないから全戦力は使えない」

分隊長らが輝度を落としたタブレット端末を起動させ、北斗衛星からの情報を得て自分たちの居場所を特定する。

一人が、戴中佐に行き先を指し示した。

さて、二日で全滅するか二日で制圧するか、どちらに賭けるべきだろう……。

雷大佐は、目の前の枝を右手で払ってジャングルに分け入った。枝を払った途端、大量の雨粒が跳ねて顔を直撃し、チツと舌打ちをした。

惨めな気分だ。こんな惨めな経験は、新兵時代の野営訓練以来だ。

階級が上がればこんなことはせず、エアコンが効いた部屋で楽して過ごせると思っていたのに……。

人民解放軍の南シナ海東沙島電撃奪取に端を発した東アジアの騒乱はあっという間に拡大し、東シナ海、尖閣諸島へと迫った。

中国軍は、旧型戦闘機一〇〇〇機をドローン化して出撃させ、日本と台湾の空軍戦力を疲弊^{ひへい}させ、その混乱に乗じて占領部隊を魚釣島に上陸させていた。

日本側は、すでに島に潜入していた元陸自隊員らで編成される民間軍事会社の一個小隊に合わせ、陸自特戦群の二個小隊を辛うじて上陸させた。

同時に偵察部隊を潜入させていた台湾軍は、戦闘ヘリ部隊と海兵隊を上陸させた。表向きは、自衛隊を応援するという目的だったが、戦略的忍耐を掲げてなかなか動こうとしない日本に業^{ごう}を煮やしての上陸だった。

第一章 橋頭堡

陸上自衛隊特殊作戦群第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実特殊部隊、サイレント・コア、二個小隊を率いて魚釣島西端に上陸した土門康平陸将補は、先に上陸していた民間軍事会社の手招きですぐ藪の中へ入った。

平地はあつてないようなもの。平坦な場所すらもほとんどない。海岸線から緩やかな角度で、山裾へ繋がっている。

民間軍事会社の指揮所は、そんなジャングルの中であつた。

ポンチヨを着たまま天幕の中に入ると、会いたくもない男が軽く敬礼して待っていた。天井から

垂れ下がる赤いLEDランプが揺れ、硝煙まみれの相手の頬を照らした。

「大変だったようだな」

「犠牲は払いました。戦死者二名、重傷三名です。さっきのキャリバーCHの攻撃で敵は後退した。

助かりました」

西銘悠紀夫元二佐は、土門に枯れ木で作った長椅子に腰を下ろすよう促した。

「間に合つてよかった。しかし、なんでお前みたいな国士様がこんな場所にいるんだ？」

「仕事だからです。無論、志願しました。寄せ集めのOB部隊ですよ。こういう部隊を纏めて危険

な任務につかせるには、自分みたいな哲学の持ち主も必要でしょう。あなたは賛成しないだろうかね」

「話はおいおい聞くとして、それで、君らはもう三日三晩ここにいるんだろう。少しは休め。われわれが前線に立つ」

「いえ、その必要はありません。昨日までは静かでした。山羊やぎを丸焼きにして、キャンプ・ファイアもしていただくくらいです。まだまだ戦えます。それより、水機団の上陸はどうなっているのですか」

「水機団は来ない。仮にわれわれが全滅しても、日本政府は関知しない。何しろ君らは民間人だし、われわれも、存在しない部隊だ。政府は戦略的忍耐をモットーとし、人民解放軍が魚釣島に上陸しているという事実を今後とも認めない。上空でいろいろとやりあったが、それは東シナ海の上空で

起こったことであり、尖閣諸島は関係ないという立場を堅持する」

「はあ……」

西銘は、どう反応していいのかわからないという顔をした。

「だからさ、君みたいな国士様は東京にいて、永田町たちょう周辺で裏工作に励んだ方が役に立つと思うぞ」

「でも、正規軍部隊まで上陸してきたんですよ。それでも忍従するというのですか？」

「さすがに正規軍が上陸したとなると状況が変化する可能性はあるだろうが、それもわれわれの期待に過ぎない。希望はもたない方がいいな。陸幕として、この程度ならしばらく支えられると判断したら、水機団の投入は無いだろう。事が大げさになれば、失われるのは戦闘機だけで済まない。イージス艦も沈むことになる。この無人島を守る

ために、自衛隊の全戦力を使うわけにもいかんだろう。残念だが、全体の戦略を決めるのはわれわれではない。現状では、米軍がどこまで支援してくれるかもわからないからな。今日は陽が昇ったら、敵の出方を見よう。こちらから積極的に討つて出るようなことはない。とにかく、休め。ご苦労だった」

「わかりました。この場所は、使いますか」

「いや、指揮所は複数あった方がいい。われわれは、自前で立ち上げる。それに、台湾軍部隊もそれなりに遇する必要がある。ホストとしてな。ここでは狭い。連中、いつまで居座るとか言っていたか？」

「いえ。でも、装備的にも長居はできないようなことは言っていましたか」

「先に挨拶してくるよ。失礼があっちゃ拙い」

土門はさっさと腰を上げた。指揮所を出ると、

道案内と称して、副隊長役の赤石富彦あかいとみひこ元三佐が追いかけてきて、自己紹介してきた。暗闇で、しかも全員迷彩ドローンを塗っているため、誰が誰だかさっぱりわからない。

「陸将補。補給便が来るなら、西銘さんを解任して追い払うか、自分をその便にらせてください」
土門はポンチョのフードを被りながら「どういうことだね」と立ち止まった。

「最初、敵と交戦した時、ドローンで迫撃砲弾を落とされ、痛い目に遭いました。自分が負傷者を抱えて後退しているとところに西銘さんと遭遇し、あの人はその場でピストルを抜き、負傷者を撃ち殺したんです」

「それがなかったら、そいつは助かったか？」

「わかりません……。たぶん無理だった」

「確か君は、水機団の出身だったよな。ここは戦場だ。とんでもなく非人道的なことがまかり通る。

私もあの男は嫌いだ、戦場という深い霧の中では異常な出来事が起こるものだ。君がここを離れたいなら、考慮しよう」

「自分たちの役割はわかっていたつもりですし、捨て駒であることも承知しています。しかし、この期に及んで正規部隊が来ないのは釈然としない。防衛出動命令すら出ないなんて」

「政治ってのはそんなものだ。君たちに負担をかけるように、努力するよ。その怒りは胸にしまっておけ」

民間軍事会社なんてのを使っているのは、中東の警備請負くらいだな、と土門は思った。正規軍部隊同士での戦闘を前提に作られたものではないのだ。あくまでも自衛隊の退職者の雇用を確保し、次の国連平和維持活動任務があつたら、その後始末をするための軽武装集団と捉えていた。

沖合で解放軍部隊を警戒していた台湾陸軍のA

H-64E アパッチ・ガーディアン 戦闘ヘリ二機が降りてきた。

台湾軍海兵隊がランディングゾーンを確保し、暗視ライトで誘導していた。

二機ものヘリが着陸するには、ぎりぎりのスペースしかない。一番機の着陸を二番機が見守り、ようやく降りてくる。

ローターの回転が止まると、藪の中から指揮官らしき男が出てきた。アサルト・ライフルの銃口は下げているが、右手の指二本はトリガー・ガードに当てていた。

そして男は英語で、怒鳴るように言った。

「北京語を習った相手は誰か？」

それを聞いた土門は、やれやれという顔で「中華料理屋の女将だ」と北京語で応じた。

すると相手は直立不動の姿勢で敬礼し、北京語に切り替えた。

「失礼しました。自分は、海兵第99旅団情報参謀の呉金福少佐であります」

「ご苦労、少佐。私がこの部隊を率いてきた土門だ。一応、将軍だけだな」

土門は、碎けた口調で続けた。

「はい。高位の指揮官が率いる部隊であると連絡を受けております。しかし、この符牒の意味は何でありますか？ 中華料理屋の女将とか」

「まあ、暇があつたら教えてやるよ。君が指揮官なのかね」

「陸軍部隊、戦闘ヘリ部隊の中隊長もおりますが、作戦全般にかんしては自分が台湾側の指揮官として動くよう命じられています。自分は、つい夕方まで日本の潜水艦に乗っておりました」

「ほう！ ということはつまり、東沙島防衛部隊の生き残りか。たいしたもんだ、ぜひ話を聞いた

「光栄です。日本の助けがなければ、今頃自分はここにはいません」

「そういえば、実は、君らを助けるために最初に東沙島に上陸したコマンドは、私の部下だ」

「だろうと思いました。北京語を流ちょうに喋っていた」

「私の部隊では北京語が必修だが、まあ、ここでの公用語は英語で願うよ——」

ここで突然、女性の声が聞こえてきて土門は喋るのを止めた。

「整備兵かね？」

「それなのですが、……戦闘ヘリのパイロットの一人が女でありまして、何と申しますか、やはり女は拙いですよ」

「とんでもない！ うちのナンバー2も女性だよ。もう指揮所設営に取りかかっている。あとで紹介するよ」

その後呉少佐は、戦闘ヘリ二機と整備兵を連れてきた陸軍第601航空旅団、別名〃龍城部隊〃の第1中隊長・平龍義少佐と藍志玲大尉と呼んだ。

墜落時に備え、二人は迷彩ドーランを顔に塗っていた。辛うじて、シルエットで一人が女だとわかる程度だ。

だが土門は、その士官の名前に聞き覚えがあった。

「ラン・チャーリンだって!! あゝ、グラビア・アイドルの?」

「光栄ですわ、日本の将官に名前を覚えていただいています。しかも、将軍が北京語を喋るなんて、驚きです」

藍大尉が敬礼した。

「われわれも〃先端科技〃くらいは読む。台湾の軍事雑誌は、あらかた読んでいるよ。しかし、あなたは、その、言っては何だが、リクルート用の

作られたキャラクターではなかったのですか」

「表向きはそういう話になっておりますが、間違はなくわが部隊のナンバー1です。夕方の機関砲による援護射撃も、彼女がやってのけました」

平少佐が説明した。

「それは、ありがとう。感謝するよ! うちの部隊にも、あなたのファンはいる。後で記念写真を撮ってくれ。しかし、驚いた。ということは、つまり、呉少佐の任務は……」

「はい。彼女を守り、無事に連れ帰ることであります。戦力的には、陸軍フロッグマン部隊の何一中大尉とともに戦います。今は、周囲の警戒についておりますが」

「何から何まで、すまんね。何しろ、うちの政府は動きが鈍くて。ここでの戦闘発生自体、認めようとしな。皆さんの協力は、非常に貴重なものとなる。仲良くやり抜こう。聞きたい話が山ほど

ある。……この雨だ。敵も夜明けまでは、陣地構築に忙しくて仕掛けてはこんだろう」

「指揮所設営でしたら、自分たちもお手伝いします」

「ありがとう。だが、君らの方がたとえ半日といえども先に上陸したし、地理にも通じている。われわれが指揮所を立ち上げるまで、周囲を警戒してもらえると助かるよ」

「問題ありません。しかし、そちらもたいした荷物ですね」

道路もないのに、軽装甲機動車二両が藪に突っ込んで隠れてあった。

「ああ。何しろCH-47で来たからね。運べるものは何でも運んできたよ。さて、夜明けまでに指揮所を立ち上げよう」

台湾軍海兵隊員は、すでに戦闘ヘリのローターに偽装ネットを掛ける作業をはじめていた。

土門は、あらかじめ部下が選定した指揮所のロケーションへと歩いた。

島の西端から、やや南東へと回り込んだ場所を考えていた。何年も研究と議論を重ねた末の場所だった。移動しながら、無線機のインカムで部下を呼んだ。

「チエスト、アイガー、来てくれ！」

チエストこと^{ふくとめだん}福留弾一曹と、アイガーこと^{あづま}吾妻大樹^{だいき}三曹が駆けつける。アイガーは、一二ミリ径の束ねたロープ二本を、両肩からX字にたすきがけしていた。そのロープは、カモフラージュ迷彩柄だ。

アイガーは、ありとあらゆるクライミング・ギアを装備し、持ち歩く銃はピストル一挺だ。一見するとただのクライマーにしか見えないが、そのクライミング・ギアの全てが迷彩柄だった。

「アイガー、登れるか？」



★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。